

山門郡瀬高町におけるそさい園芸の動向について

和田 武 利
(福岡県立農業試験場)

WADA, T.

Development of Vegetable Growing in Setakamachi, Fukuoka Pref.

山門郡瀬高町のそさい生産は矢部川下流の肥沃な沖積畑地帯に展開している。

まず秋冬作そさいについてその動向を見よう、代表作物は白菜である、瀬高白菜は大正後期から除々に作付面積が増大し昭和初期にはすでに瀬高白菜として名をあげている、昭和10~15年頃が最盛期で畑の8割に白菜が栽培されていた、その後戦争のため肥料・労力の不足で一時減少した、戦後は24、5年頃が最盛期でやはり畑の8割に白菜が栽培されていた。しかしそのころから長期連作の害が現われて病害の多発をみるようになり、収量が極端に減少し、その結果作付面積も減少の一途をたどり、昭和28年を100%として37年には40%になっている。

昭和31、32年白菜面積が減少の過程にあった頃農家はその代替作物の選定に迷っていた。その後になんじんが白菜に替って大きく伸び、昭和28年を100%とすれば37年には288%になり、その他ねぎは218%、ほうれん草が158%に増加し、これらで白菜の減少した畑面積の80%をカバーしている。

次に春夏作そさいの動向についてみると、果菜類が最も多い。瀬高町は戦前から油障子を利用したハウス経営が行われ、キュウリの半促成栽培が盛んであった。その後昭和25、6年にビニールが導入されるにおよんでトマトの半促成栽培も盛んになってきた。また最近なすにビニールを利用したトンネル栽培が行われ好成績をおさめるようになってきた。36年頃から鉄骨ハウスが急激に増加し、ハウス経営の規模拡大が行われつつある。木骨ハウスでは毎年建設に多くの労力を要しまた構造上ハウス内の管理作業に多くの労力を要して

いたため規模拡大が容易でなくハウスの面積は多くて660m²であった。鉄骨ハウスになり労力の面から有利になり、現在では多い農家は1300m²のハウスを営している。

主産地形成には自然条件が大きく左右することは言うまでもないが、指導機関の役割も大きい。共同出荷にしても旧瀬高町は集落毎に出荷組合を作り、昭和初期から30年来共同出荷をしてきたが、市場において集落間の競合がありお互に不利益を被っていた。37年に農協で中央集荷場を作り、になんじんの選別機を入れて共同出荷体制を強化した。その結果になんじん栽培規模拡大の障害になっていた選別、包装労働が省力化され、になんじん栽培に明るい希望が持てるようになった。その他のそさいも共選の組織に乗せたため出荷労働が大巾に減少し、規模拡大が容易になった。

以上要するに主産地を形成していた白菜が病害のため全滅し、それに替る作物としてになんじんが大巾に伸び主産地を形成するに至った。になんじんは白菜に比し粗放作物であり、技術の進歩により除草等管理作業が省力化できて規模拡大が容易になってきた。

またになんじんは連作の害が比較的少ないとされているため今後相当期間にはなんじんの主産地を形成し続けるであろう。しかし白菜のように20年、30年と連作した場合どうなるか、今後の問題として残る。また春夏作について最近普及してきた鉄骨ハウスの利用組織が未だ確立しておらず、果菜類収穫後水稲栽培を行っている農家もあり、鉄骨ハウスの有利な利用方法を早急に確立する必要がある。